『二都物語』における気絶と斬首

川崎　明子

1. 気絶と斬首の相似

チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）の『二都物語』（*A Tale of Two Cities*, 1859）は、多くの死を含むが、ダーネイ夫妻の長男など少数の例外を除くと、そのほとんどは当時のフランスの政治経済的状況に直接･間接に起因する[1]。本論文では、気絶と斬首の相似を前提に、主要人物の気絶経験を吟味し、死と再生の型を分析し、作品の時間意識を考察したい。

多数の人々が命を落とす『二都物語』では、生き残る者たちも気絶という形で死を経験する。気絶は一種の死、特に斬首による死として機能する。気絶と死が同列に置かれることは、マダム・ドファルジュと対決するミス・プロスの「私たちのどちらかが、気絶するか死ぬまで、抑えていてやる」（353）という台詞に要約される。またマダム・ドファルジュを中心とするサン・タントワーヌの「編み物女」（*tricoteuse*）たちが処刑予定者を編み込む行為には、「落ちる首を数えながら」（179）という、ルーシーの気絶場面と同じ「頭（head）が落ちる･垂れる（drop）」という表現が使われる。さらにはシドニーの処刑の際に、ギロチンの刃が音を立て、上がっては落ちる様子も、気絶し倒れる人を思わせるかもしれない。

1　本論文は2017年10月7日に東京大学駒場キャンパスにて開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部平成29年度秋季総会における「『二都物語』における気絶―死の共有」の発表原稿に加筆修正したものである。関係者各位に感謝申し上げる。

気絶と死の相似は、気絶の医学的説明においても示唆される。当時と現代の医学的著作における、この点および気絶全般における要点を確認したい。まず1769年に出版され19世紀中期まで版を重ねたBuchanの*Domestic Medicine* は、気絶（Swoonings）の主な原因を、1）寒さから暑さへの急な変化、2）弾力性を欠く空気の呼吸、3）重度の疲労、過度の衰弱、失血、長期間の絶食、4）恐怖、悲嘆、その他の精神的な激しい情熱や感情とした（326）。興味深いことに、第2の原因について、人込みなどで何度も呼吸された空気を吸って気絶する場合を、「一種の一時的な死」（“a kind of temporary death”, 327）と表現している。専門的な処置への言及はない。19世紀に版を重ねたGrahamの*Domestic Medicine*（1826）も、気絶（Fainting, or Syncope）の主因はバカンとほぼ同じだが、治療については、頻繁に繰り返さない場合は、横臥、アンモニア、酢、四肢の摩擦、ワイン、ブランデー、水などで対処し、頻繁に繰り返す場合は錠剤を処方するとしている（399）。最後に、Peter WingateとRichard Wingate による20世紀末の一般向け医学事典は、気絶（faint〈syncope〉）のメカニズムにつき、患者の頭が心臓の位置まで下がると、脳への血流が回復すると解説する（243）。以上の医学的説明のうち、『二都物語』の気絶の考察のために確認すべき点は、第1に気絶が一種の仮死であること、第2に心理的要因があること、第3に健康な人の場合は基本的に専門的処置は必要ない、つまり治療を要するような病気ではないこと、第4に心臓の位置まで「頭が下がる」と回復に向かうことである。

ちなみに、ディケンズが『二都物語』執筆のため、500回も読み多大な影響を受けたという（田中「二都物語」317）Carlyleの*The French Revolution*（1834）にも気絶の記述は複数ある[2]。しかし「頭が落ちる・垂れる」という

2　Carlyleによると、バスティーユ監獄襲撃の際、司令官ド・ローネーの娘と間違えられた娘は、焼き殺されそうになり気絶し（163）、ヴェルサイユ行進の代表女性の一人ルイゾン・シャブリ（Louison Chabray）は、ルイ16世と会見中気絶しそうになる（223）。この他にも、興奮、緊張、恐怖等による気絶や気絶未満（93; 498; 706）、事故、病気、疲労などによる気絶も記録される（363; 395; 726）。

表現はない。気絶と斬首の相似は、ディケンズ独自の設定といえる。

2.『二都物語』の気絶場面

『二都物語』における気絶を、ルーシー、マネット、チャールズの順で検討しよう。全体に顕著な特徴は、誰かの「気絶･仮死」が、別の人物の「生･命」とペアになることである。『二都物語』に多数の対概念があることはよく指摘されるが（例えばHutter, "Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*" 455)、生と死もその重要な一つといえる[3]。

ルーシー・マネット

登場人物の中で最も頻繁に気絶するのはルーシーで、計5回である。1回目は、ロリーから父の生存の知らせを聞いた時で、椅子に座りロリーを見つめたまま、意識だけを失う。ミス・プロスが嗅塩、冷水、酢を手配し、ソファに寝かせて意識回復に成功し、その「うな垂れる頭」(30) を自分の肩にもたせかける。ミス・プロスがロリーを責める「死ぬほど怖がらせることなしに話ができなかったのか」(30) という表現にも、気絶と死の関連が示唆される。父の生存は吉報だが､父の生と引き換えに､ルーシーが仮死状態に陥ったかのようである。

2回目は、5年後の1780年、オールド・ベイリーでの裁判中、証人の証言が終わり、シドニーの機転で、彼と被告人チャールズ・ダーネイの相似が指摘され、無罪判決が出る前のことで､「ミス・マネットの頭が父親の胸に落ちた」(73) と表現される。すぐさまシドニーが気づき助けを出す。こうして彼は、チャールズを有罪から、ルーシーを気絶から救う。ルーシーが先に仮死状態に陥り、チャールズが無罪となり命拾いする。

3　「誰かの生存」と「他の誰かの仮死」の組み合わせは集団レベルでも起き、自分の葬式を出して死を装ったフーロンの生存を知ったパリの女たちは、怒り狂って集団的気絶を起こす (215)。

3回目の気絶は、1792年9月、今では夫となったチャールズの消息を尋ねに、父と共にパリのロリーを訪れた時である。父が娘婿を探しに九月虐殺の最中に外出したという知らせに、ルーシーは床に倒れ昏睡状態に陥る。一時的に死んだルーシーと対照的に、マネットはチャールズの救済という目標を得たことで、この後、革命の英雄および有能な医師として、生まれ変わったかのように活躍することになる。

4回目は、チャールズが裁判で無罪釈放となり帰宅した時で、判決を既に知っていたが、夫が実際に戻ると意識を失いその腕の中に倒れ込む。こうして夫は生存が確定し、妻は仮死に至る。この後マネットが娘の頭を抱え、自分が娘婿を救ったことを誇る姿は、社会的再生を遂げた父が、今や娘より社会的に強い存在になったことを示す。

5回目の気絶は、最後の裁判で夫の死刑判決を聞いた後である。直後は夫を慮って衝撃に堪え、別れの抱擁をするが、夫が連行され見えなくなると、「父の胸に愛らしく頭をもたれかけさせ、何か話そうとするが、父の足元に倒れた」(321)。ロンドンの法廷場面と同様に、シドニーが現れ、腕を差し出し頭を支える。シドニーはここで気絶したルーシーを助け、さらに後で身代わりの死を遂げチャールズを救う。こうして妻が先に仮死し、その後夫が蘇生する。

以上の例から見て取れることは、第1に、ルーシーは吉凶両方の知らせに反応する。第2に、気絶はプロット展開に無関係である。第3に、ルーシーの気絶は「頭が落ちる」と表現される。それに関連して第4の特徴は、その頭を支えることは、支える人の好意を表す。ルーシーは、ロリー、ミス・プロス、シドニー、父マネット、チャールズなどに頭を支えられる。自身も、初対面の父が気絶すると頭を腕で支え、さらにそばで頭を横たえ、仮死状態を共有する。この直前にルーシーは、父の胸に亡き母の頭がもたれる様子を想像しているので、頭を胸に抱く行為を愛の行為と認識しているのだろう。

アレクサンドル・マネット

マネットは、気絶に喩えられる長期的な精神の昏睡状態と、2度の短時間の字義的気絶を経験する。彼は医師としてチャールズの父とその双子の弟の悪行を目撃し、それを報告しようとして、18年間バスティーユに収監され、気絶や瀕死状態に喩えられる精神状態に陥る。

> The task of recalling him from the vacancy into which he always sank when he had spoken, was like recalling some very weak person from a swoon, or endeavouring, in the hope of some disclosure, to stay the spirit of a fast-dying man.（43 下線筆者）

マネットの比喩的な気絶および仮死状態の特徴は、第1に、彼の手記から病識を持つ時期があるとわかるので、このような精神状態に陥るのにある程度の時間がかかったこと。第2に、靴作りの作業を始めるなど、症状の出現が明確で即座であること。第3に、医師として活動する時の有用な姿と、症状が出ている時の無力な様の差が激しいこと。さらに重要なのは第4の特徴で、正常な状態と異常な状態を繰り返すことである。バスティーユ監獄から解放後、ロンドンでは医師として働けるほどに回復する。しかしロンドン塔で「掘る」という文字が発見されたと聞くと、明らかに動揺する。すぐに回復するが、娘が結婚して新婚旅行に出発すると、症状がぶり返す。この時、靴を作る際の「頭がうな垂れた」（188）様子は、彼の比喩的気絶状態が斬首に似ていることを示唆する。この時はフロイトの精神分析療法的なロリーの言語的アプローチにより、2週間以内に回復する。しかし結末近くで、チャールズに死刑判決が出ると、再び靴作りを始める。

字義的な気絶は、症状が出ている時と安定した時期に1回ずつ起きる。いずれもプロット展開には影響しない。1回目は、ルーシーと対面した時で、自分は靴職人だという妄想下にある。娘が父の生存を知り気絶したのと同様に、父もルーシーの生存を認識して気絶する。娘の生が、父の仮死を引き起

こしたといえる。覚醒後、時折頭を両手で抱え込む仕草を見せるが、これは自分の頭があることを確認する行為、すなわち長期間の気絶および斬首による死の状態から脱し、自分の新生を驚きをもって確認する行為といえる。

2回目は九月虐殺の際、チャールズを訪ねてラフォルス監獄に赴き、釈放された囚人が誤解により襲撃され負傷し、その手当のため外に出た時である。自身が経験した睡眠に似た精神の不調とは異質な暴力的狂気に、両手で目を覆い気絶する。しかしこの後、虐殺や処刑で多くの首が斬り落とされる中、マネットが恐怖に負けず「安定した頭で歩む」(walked with a steady head)ことが、ほぼ同じ表現で3回繰り返される (263, 266)。「この新しい生」(261)という表現が示唆するように、ここでも彼は斬られた頭を取り戻し、新生を果たす。マネットの気絶は、処刑を免れたチャールズの生や、治療され生き延びた釈放囚人の生と対になるが、より重要なのは、それが彼自身の新生と一組になることである。

チャールズ・ダーネイ

チャールズは、気絶しそうにはなるが、実際に自然な気絶をすることはない。同様に、何度も死刑判決の危機に瀕するが、実際に死ぬことはない。ロンドンで無罪判決を受けた直後、疲労しているが倒れはしない。パリの裁判で無罪となった時も、「疲労から気絶する恐れがあった」(274) が、釈放を歓迎する民衆を冷静に観察する。彼が唯一気絶するのは、シドニーが嗅がせた薬の効果による。シドニーは面会に訪れ、チャールズの意識を失わせ、衣服を取り換えて彼になりすまし、面会者が友人の死刑を悲しむあまり気絶したことにしてチャールズを救出する。この人為的な気絶は、『二都物語』で唯一プロットに影響する気絶である。チャールズが助かりシドニーは処刑されるという点で、チャールズの生とシドニーの死が対になる。同時に、チャールズが仮死に至り、のちにシドニーが人々の記憶に蘇るという点では、チャールズの死とシドニーの生が対になるともいえる。

3. 気絶し回復する、斬首され再生する、埋葬され掘り出される

気絶と斬首による死が同様の機能を担う『二都物語』においては、気絶した人の頭が心臓のレベルまで下がると回復に向かうように、斬首刑で首を落とされた者も後で再生する。語り手はテルソン銀行を紹介しながら、当時はあらゆる職業において、死は流行の「処方箋・解決策」(recipe) であり、あらゆるものに対する「自然の治療法」(Nature's remedy) であったと語る (52)。皮肉を込めた表現ではあるが、処方箋も治療法も生を志向する概念である。さらにギロチンについても、やはり皮肉を込めてではあるが、「人類の再生のしるし」(262) とし、全体の生のために一部の人が犠牲になるという考えを示す。実際、フランス革命の支持者には、旧体制が滅ぶことが国家再生に不可欠だという考えがあり、フランス革命という運動自体が、死と再生の概念を内包していた。竹中によると、1792年7月14日のシャン＝ド＝マルスで行われた祭典では、盾や紋章で装飾された「貴族の木」が火をつけられて焼かれ、その様子に人々は喝采した。祭りが一般に「死と再生」の構造における「再生」への願いを表すことを考慮すると、この儀式は、市民の再生のために、旧体制とその中心人物である貴族を葬り去りたいという心性を示している (66; 70; 100)。Carlyleの*The French Revolution*においても、国家の健全化のためには病んだ旧態が治癒しなければならない、死がなければ誕生もないという考えが、キリスト教的概念を用いて表明される。下の引用は1789年5月の全国三部会開催に関してである。

> It is the baptism day of Democracy; sick Time has given it birth, the numbered months being run. The extreme-unction day of Feudalism! A superannuated System of Society, decrepit with toils (for has it not done much; produced *you*, and what ye have and know!) — and with thefts and brawls, named glorious-victories; and with profligacies, sensualities, and on the whole with dotage and senility, — is now to die: and so, with death-throes and birth-throes, a new

one is to be born. What a work, O Earth and Heavens, what a work!（Carlyle 113 下線筆者）

フランス革命を担った実在人物たちも、死と再生の考えを表明している。ロベスピエールは、いつでも革命のために死ぬ覚悟があり、テルミドールのクーデター前日の演説でも「死は不死の始まり」と語り（安達『フランス革命の志士たち』192）、死後も自分が人々の記憶に生き続けると考えていた（ヴォヴェル316-17）。ギロチンに向かうシドニーとお針子のやり取りや、彼の最後のメッセージは、ディケンズがロラン夫人から構想を得たといわれるが（田中「二都物語」329）、その夫人は死刑を覚悟しつつ、恋い慕うビュゾーに宛てた手紙の中で、この世で叶わぬ愛を来世でとげようという願いも込め、「良き人々が再生するあの世というものがきっと存在するに違いありません。そうでなければ、この世に生まれたことが、いったい、何の役に立つというのでしょう」と書いた（安達『フランス革命と四人の女』130）。二人を死に至らしめたギロチンは、ヴォヴェルがいうように、従来の拷問を伴う死刑とは全く異なる発想から誕生した、啓蒙思想に則って苦しむ時間を短縮するために考案された人道主義的発明であった。この死刑形態は、新しい市民的な死を与える外科手術であり、宗教的意味合いを持つ過去の遺産というより、未来の先取りと見なされるものであった（313）。『二都物語』は、死によって再生を実現するという革命思想を、社会的には無力で受動的なルーシーをも含む主要人物の死や気絶を通して共有し、創造的にドラマ化しているのである。

「死から再生へ」という型は、特に「埋葬から蘇る」という型を取る。早くも第1部第2章と第3章で、マネットについて思いを巡らすロリーの脳裏に浮かぶ表現として「生き埋めにされた」（buried alive）、「掘り出される」（dug out）、「生き返らせる」（recalled to life）という過程が提示され、この型はこの後、多様な形で展開することになる。そもそも「生き埋め」は『二都物語』の三つの仮題のうちの一つであった（田中「二都物語」315）。埋められ

たものが蘇ることは、常に建設的な結果をもたらすわけではない。破壊的な例としては、植木が指摘するように、バスティーユに隠したはずのマネットの手記がチャールズを死の危険にさらしたり、ロリーとプロスがマネットの靴作りの道具を埋めたが最後にマネットの病気が再発したりすることがある（245-47）。他方、建設的で生産的な蘇りの場合、蘇った人物の社会貢献や、蘇りを助けた人物の利他精神が強調される。マネットは、彼が手記で「墓」（318）と形容した バスティーユ監獄から「掘り出される」ことで（50）、ロンドンやパリで医師として活躍し、今度は自分が投獄されたチャールズを「掘り出す」。チャールズがロンドンで無罪判決を勝ち取る前の状態は「彼のために掘られた墓の縁にいる」（125）、渡仏直後にラフォルス監獄に収監されることは「埋められる」（243）と表現されたが、彼はマネットにより一時的に救出され、最終的にシドニーによってコンシエルジュリ監獄から助け出され、死刑を逃れる。

ロリーやマネットが生き埋め状態の人物を墓から掘り出すことが比喩的であったのに対し、テルソン銀行の使い走りジェリー・クランチャーは、文字通り墓地に埋葬された死体を掘り返し、外科医に売って副収入を得ている。死体発掘は、死者の魂の永遠の命を乱すとしてタブーであった（Hutter, “The Novelist as Resurrectionist”3）。 また死体の解剖は、裸体をさらすという死者に対する侵害や無礼を表すのみならず、意図的に体をばらばらにしたりアイデンティティを破壊したりすることを意味した（Richardson 29）。ジョージ王朝期には、死体が解剖学者によって切断されると、最後の審判の日に完全な状態で復活できないと恐れられた（Moore 35）。ディケンズ小説においては、*Our Mutual Friend*（1864-65）のSilas Weggがこの考えのもと、脚を取り戻そうする。しかし1832年の解剖法制定以前は、非合法的手段によらなければ死体の入手は困難で、人体の解明が進まなかったことも事実である（Hutter, “The Novelist as Resurrectionist” 2-5）。この点で、ジェリーは医学研究、さらには人類全般の生に貢献している。

吉田が、シューターズ・ヒルでジェリーから伝言を受け取ることで、ロリー

に「掘る魂」が乗り移ったかのようであると指摘するように（153）、テルソン銀行のために働いているという以外に、一見共通点のないこの二人は、埋められたものを掘り返し蘇らせるという同じ役割を担っている。個人レベルでマネット一家を手助けするロリーと、間接的に医学に貢献するクランチャーは、Woodが指摘するように、それぞれのビジネスを通じて他者に貢献しているのだ（54）。さらにマネットは、バスティーユ監獄の手記では内科医と自称するが、「もともとは優秀な外科医」（307）であった。Frenchによれば、18世紀のフランスでは、外科医は一般医の役割を担い、内科医に代わって解剖を担当するようになった。革命期には、解剖が市民や兵士に役立つという理由から、外科医が重視されるようになり、革命政府は内科医と外科医の役割を一元化するに至った（98-99）。ロンドンで医業を営むマネットは内科医と呼ばれ、ジェリーが彼に死体を売る可能性はほとんど示唆されないが、九月虐殺以降にパリで医師として活躍するマネットは、主に怪我人の処置に従事したと思われることから、解剖まで行わずとも、外科医の様相をある程度取り戻し、結果としてジェリーの副業との連想が増す。このように、ロリー、ジェリー、マネットの一見共通点のなさそうな三人は、人を掘り起こして人類に役立てる人物のイメージを共有している。

死んでから再生するという型を最大規模に体現するのがシドニーである。身代わりの死を決意した彼が繰り返し思い浮かべる「わたしはよみがえりであり命である」（“I am the resurrection and the life”）という言葉が、『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」からの引用であると同時に（John 11: 25-26）、『祈祷書』（*The Book of Common Prayer*）の「埋葬」の冒頭部分であることは、埋葬後に掘り出され新生するという型を強調する。シドニーはルーシーに対し、自分は若くして死者のようであったが、彼女が「自分の中から死んで出て行ってしまったと思っていた昔の影」（145）を刺激したと説明する。彼は、ルーシーの存在から、蘇りの概念を得たのである。Stewartも指摘するように、父が死んだ時、既に母も亡くなっていたシドニーは、孤児となり比喩的に地中に埋められた。しかしチャールズの代わりに死ぬ決心をし

た時、父の葬儀を、埋葬の儀で唱えられた「わたしはよみがえりであり命である」の言葉と共に思い出し、そのことによって、過去の自分から部分的な蘇りを果たし、生き埋め状態を脱する（86）。

マネットの社会的再生が頭を高く上げ続けることに象徴されたように、シドニーは主体的に死を選択し、最後まで明晰な頭を維持することで、斬首で頭部を喪失しても、蘇りを実現する。Woodが指摘するように、ギロチンによる死が一瞬のことであっても、最後の内的独白によって、彼はJallandが定義する精神的に明晰で過去を振り返る余裕のあるヴィクトリア朝的「よき死」を遂げる（Wood 57; Jalland 39-58）。こうしてダーネイ家の救世主となった彼は、ルーシーの娘が老いて孫たちに彼の言葉を伝えたと語り手が報告するように、人々の記憶の中に生き続ける。さらにシドニーの予言的独白では、彼はダーネイ家に新たに誕生する男児の中に蘇り、彼と同名のこの男子が同業に就き成功することが示唆される。シドニーの死は、イエス・キリストの死と蘇りを思わせるため、罪深い自殺ではなく尊い犠牲と認識される。出版当時、人々が自己犠牲の精神を好んだこともあり、シドニーの死を自殺として非難する風潮はなかった（Gates 71）。彼の動機に注目しても、身代わりの死は、個人的な死の欲動ではなく、ルーシーへの純粋な愛によるため、涜神的行為にはならない（山本152）。むしろディケンズは、彼の自己犠牲を、利益を得ようと信仰にすがる形式的なキリスト教徒と対比すべく設定したと考えられる（吉田156-57）。Sandersがいう通り、彼の犠牲は、最後に生が死に勝ったことを示す（169）。

ジェリー・クランチャー親子は、再生の型や死者の次世代への継承を、小規模で滑稽に反復する。ジェリーが「復活屋」（resurrection man）と呼ばれ、親子が全く同じ名を持つのは、その強調である。ある時息子は密かに父親を尾行し死体盗みを目撃し、「半分死んで」（155）から「昨夜とは非常に違う」（156）人物に生まれ変わり、自分も将来復活屋になりたいと願う。結局父ジェリーは、ロリーに秘密を悟られ、副業から足を洗うことにし、息子を将来テルソン銀行の使い走りにしてほしいと頼み込むが、いずれにしても父の職業

を息子が引き継ぐことに変わりはない。

しかしすべての死が再生を伴うわけではない。再生に至る死は、革命思想を象徴する斬首による死に限られる。ギロチンが発明される前は、斬首刑は高貴な身分の者のみに執行され、身分の低い者は絞首刑となった(Stout)。『二都物語』において、字義的・比喩的な斬首による死は、基本的に生き延びる主要人物だけに与えられる特権である。斬首以外の死は、気絶に喩えられず、再生も伴わない。

苦しみが最小限で済む斬首による死も、死後の再生も与えられないのが、フランスの平民である。サン・テヴレモンド侯爵の小作人たちは、侯爵の前で実際に平伏し、比喩的にも搾取されている。彼らの長期的な貧困は、治療を要さない気絶ではなく、治療なしには治癒しない病に喩えられる。夫の埋葬地に目印をつけたいと侯爵に直談判する女は、「夫は欠乏によって死にました。たくさんの人が欠乏によって死んでいきます。もっと多くの人が欠乏によって死ぬでしょう」(112) と説明し、「私が同じ病気で死んだら」(112) その場所はすぐにわからなくなってしまうと訴える。貧困は不治の病いであり、「多くの百姓の恩人である死」(113) と語り手が表現するように、その唯一の解決法は死である。

フランスの平民と生死の関係を具現するのが、マダム・ドファルジュの家族である。彼女の美貌の実姉は、侯爵に目をつけられ、性的に虐待され、錯乱状態に陥り病臥する。その夫は結婚前から病弱で、侯爵から通常以上に酷使されて死亡する。実弟は復讐を果たすべく剣を取るが、致命傷を負って死ぬ。斬首が一瞬の死刑執行であるのと対照的に、この一家が貧困や虐待に長く苦しむことは、瀕死の姉の時間を伴う死が要約する。姉の死は、作品で唯一、数日間を要するとともに、数頁を使って語られる死である。姉が発作を起こしてから約24時間後にマネットが呼ばれるが、薬も満足になく、症状は改善しない。その26時間後、「昏睡」(314) に陥り、「生きてはいたがそれ以上ではない」(314) 状態となる。さらに妊娠がわかり、回復は絶望的となる。侯爵の双子の兄、すなわちチャールズの父は、彼女が死んだかと思うが、

マネットがまだ生きていると言うと、「平民の身体には何という力があることか」(314) とあきれる。できるだけ短時間で死ねるようにギロチンが開発されたことが示すように、人が長引く痛みなしに死ぬことは難しい。姉は生きることも死ぬことも叶わない状態を、一週間も耐えねばならない。やっと死んでも再生の希望はない。彼女は確かにマネットの字義的気絶をも表現する「昏睡状態」("lethargy", 47) に陥り、ルーシーが一回目に気絶した時の「垂れた頭」("drooping head", 30) を思わせる「頭が垂れた」("head drooped", 315) という表現でもって息絶えるが、語彙は似ていても、姉の蘇りは示唆されない。

姉が再生しないことは、一家の子孫が絶えることによっても示唆される。ドファルジュきょうだいの父は、子供をこの世に送り出すことは恐ろしいとして、一家根絶を肯定する。実際妊娠は姉の不治の一因であり、本来は喜ばしいはずの新しい生命は、死をもたらす存在となっている。姉の悲劇を胸に刻んだ妹のマダム・ドファルジュは、この点を認識し、結婚しても子を持たない。ギャスパールの子が轢死した時も、村人は、長く生きて苦しむより痛みなく即死する方がよいという反応を示している。対照的にルーシーは、長男は失うものの、将来新たに男子を生むことが示唆される。美貌のルーシーが気絶という「一種の死」を経験する場面に、過度に性的な印象はないが、「小さな死」が性的絶頂を表すことや、BoothやThorpeが指摘するように、小説における気絶がしばしば女性の性的イメージに満ちていることを考慮すると、ルーシーの場合、気絶という仮死の後に妊娠という形で生が続くとも解釈できる。ルーシーが何度も倒れながらも子孫に恵まれ、シドニーが死後復活するのに対し、マダム・ドファルジュは、子を持たず、過去の出来事に目を向けたまま死に、未来と無縁である。長谷川が指摘するように、彼女の死はミス・プロスと争った際の銃の暴発による呆気ないものである。彼女をはじめとするフランス民衆の惨めな死は、シドニーの輝かしい死と対照的である (3)。

4 . 生の延長

『二都物語』における生、死、再生の型を検討したが、最後に再生と時間の関係について整理したい。蘇りを果たしたシドニーは、永遠の命を得るのだろうか。先に引用したCarlyleによる死と再生の議論においては、フランスの旧体制は強く否定的されていた。『二都物語』における旧い組織にテルソン銀行がある。しかしその旧式な体制や高齢の行員がからかいの対象になっても、銀行自体が否定されるわけではない。混乱するフランスと違い、100年ほど前に革命を終えた国の金融機関であるテルソン銀行は、十分な政治的安定の中、相応に繁盛し、長年ロリーの生活を支え、その「ビジネス」の手腕を磨き、彼が私生活で友人を手助けすることを可能にする。テルソン銀行のような長期存続する組織や、ロリーのような平穏な人生を生きる老人は、『二都物語』においては勝者である。この点でマネットの白髪は、長期の苦しみの身体化・可視化であると同時に、それほどの苦難を彼が生き延びたことの証拠でもある。第1部第4章でロリーは、ルーシーの白髪を想像するが、これは長寿を願う好意的な想像であるとともに、彼女が混乱を生き抜くことの予言でもある。他方フランスでは、政治的旧態は悪であり、人間の長寿はそもそも平民には得難い僥倖である。だからこそシドニーと共に断頭台に登るお針子は、共和国が真に貧者に益するならば、自分の従妹は老いることができるだろうと考える。

『二都物語』では、確かに円環的時間や、生物学的には不自然な時間の概念も示される。ロリーは「人生の終わりが近づくほど移動する円の中で始まりに近づく」(298) と言い、シドニーも「今の自分は老いてはいないが、若かった時も老いるような若さではなかった」(299) と返したり、後にお針子に「死後の世界には時間がない」(359) と説明したりする。最終章の冒頭では、革命の狂気は、似た条件が揃えば繰り返すという考えが、語り手によって示される。反復運動のうち最も顕著なのが、ドクター・マネットの気絶と覚醒で、それは大革命後のフランスにおける王政、帝政、共和政の交替を思わせる。

以上のような円環的・非直線的時間と並行して、『二都物語』はシドニーを中心に直線的時間も提示する。田中が指摘するように、シドニーの人間的変化は、歴史の無益な円運動を防ぎ、歴史を直線的流れに導くものである(『ディケンズ鑑賞大事典』323-24;『ディケンズのジェンダー観の変遷』213)。ただしその直線的時間は、永遠に続くわけではない。シドニーが実現するのは、復活後の永遠の生ではなく、人々の記憶と伝達による人生の延長である。シドニーに関する記憶は、作品外部まで考慮に入れた場合は、読者による読書行為がある限り続くといえるが、作品内部に範囲を限定した場合、出版年の1859年頃までとなる。小説的時間における「未来」は、ダーネイ夫妻の孫の男子や、娘ルーシーの孫への言及により、出版時周辺までは指示しうるが、それ以降への指示は特にないためである。シドニーは自身が父親の記憶を保持するため、次世代の人間が自分のことを記憶することを想像できるが、それはせいぜい孫や曾孫世代、つまり一般に個人の想像が容易に及ぶ範囲に限られる。クランチャー親子にしても、息子のクランチャーの子孫までは特に示唆されない。

シドニーが生物学的な時間を超越したとしても、未来永劫生き延びるわけではないことは、彼の永遠の魂を示唆する記述がないことからも推測できる。O'Gormanが指摘するように、ディケンズの同時代人は、もはや聖書の記述を信じられず、特に『新約聖書』の見直しを進め、魂の存続や死者の復活について再検討した。シドニーが繰り返す「ヨハネによる福音書」および『祈祷書』の「埋葬」の「わたしはよみがえりであり命である」という言葉も、イエスがラザロを生き返らせる奇跡にまつわる言葉として、論争の対象となった。宗教的確信が揺らぐ中、文学者たちは、死者の字義的復活を信じるかわりに、死者は復活するのでなく、残した言葉の中に生き続けるという、理性的な「不滅」の概念を表現した。ディケンズも、『二都物語』で新しい「復活」の概念を模索しているのである（255-260)。このような風潮を考慮すると、『二都物語』が、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』と同年の出版であることは偶然ではない。『二都物語』は、復活を素直に信じることが難

しくなってきた当時の宗教的状況と、直線的な時間の作用を明らかにした進化論に対応して、宗教的永遠ではなく、記憶という形態において可能となる個体の生の延長という時間概念を示しているのである。

参考文献

安達正勝『フランス革命と四人の女』新潮選書、1986年。

---. 安達正勝『フランス革命の志士たち―革命家とは何者か』筑摩選書、2012年。

植木研介『チャールズ・ディケンズ研究　―ジャーナリストとして、小説家として―』南雲堂フェニックス、2004年。

ヴォヴェル、ミシェル『フランス革命の心性』立川孝一、槇原茂、奥村真理子、渡辺望訳、岩波書店、1992年。

西條隆雄、植木研介、原英一、佐々木徹、松岡光治編著『ディケンズ鑑賞大事典』南雲堂、2007年。

竹中幸史『図説フランス革命史』河出書房新社、2013年。

田中孝信『ディケンズのジェンダー観の変遷　―中心と周縁とのせめぎ合い―』音羽書房鶴見書店、2006年。

---.「二都物語」西條、植木、原、佐々木、松岡、pp. 313-31.

長谷川雅世「『二都物語』の光と闇―主人公の死にある両義性―」『中部英文学』第26号、2007年、pp. 15-28.

山本史郎「『二都物語』―二兎を追うヒーローの物語」『東京大学教養学部外国語科研究紀要』第38巻第3号、1991年、pp. 141-60.

吉田一穂『ディケンズの小説とキリストによる救済のヴィジョン』英宝社、2006年。

Booth, Naomi. “Feeling Too Much: the Swoon and the (In) Sensible Woman.” *Women’s Writing*, vol. 21, no. 4, 2014, pp. 575-91.

Buchan, William. *Domestic Medicine*. Philadelphia: R. Aitken, 1771 [1769]. Eighteenth Century Collections Online. Print Editions.

Bynum, W. F., and Roy Porter, editors. *Companion Encyclopedia of the History of Medicine*. Vol. 1, Routledge, 1993.

Carlyle, Thomas. *The French Revolution: A History*. Modern Library, 2002.

Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. Oxford UP, 1999.

French, Roger. "The Anatomical Tradition." Bynum and Porter, pp. 81-101.

Gates, Barbara T. *Victorian Suicide: Mad Crimes and Sad Histories*. Princeton UP, 1988.

Graham, Thomas John. *Modern Domestic Medicine: A Popular Treatise*. 6th ed., Simpkin and Marshall, 1835 [1826]. Kissinger Publishing's Legacy Reprints.

Hutter, Albert D. "Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*." *PMLA*, vol. 93, no. 3, May 1978, pp. 448-62.

---. "The Novelist as Resurrectionist: Dickens and the Dilemma of Death." *Dickens Studies Annual*, vol. 12, 1983, pp. 1-39.

Jalland, Pat. *Death in the Victorian Family*. Oxford UP, 1996.

Moore, Wendy. *The Knife Man: Blood, Body Snatching, and the Birth of Modern Surgery*. Broadway, 2005.

O'Gorman, Francis. "The Dead." O'Gorman, pp. 255-72.

---, editor. *The Cambridge Companion to Victorian Culture*. Cambridge UP, 2010.

Richardson, Ruth. *Death, Dissection and the Destitute*. 2nd ed., The University of Chicago, 2000 [1987].

Sanders, Andrew. *Charles Dickens: Resurrectionist*. Macmillan, 1982.

Stewart, Garrett. *Death Sentences: Styles of Dying in British Fiction*. Harvard UP, 1984.

Stout, Daniel. "Nothing Personal: The Decapitation of Character in *A Tale of Two Cities*." *Novel* vol. 41, no.1, Fall 2007, pp. 29-52.

Thorpe, Douglas. "'I Never Knew My Lady Swoon Before'; Lady Dedlock and the Revival of the Victorian Fainting Woman." *Dickens Studies Annual*, vol. 20, 1991, pp. 103-25.

Wingate, Peter, and Richard Wingate. *The Penguin Medical Encyclopedia*. 4th ed., Penguin, 1996.

Wood, Claire. *Dickens and the Business of Death*. Cambridge UP, 2015.